

裸の王様による政権交代

日本プロ野球界のスパースターであった長嶋茂雄読売巨人軍の終身名誉監督が、逝去されました。現役時代の背番号は「3」、監督時代も「33」と「90」番を背負っていました。奇しくも今月の3日、午前6時39分という「3」（倍数）にこだわったまま、天国に旅立たれました。私はアンチ巨人組でしたが、小学生時代に隣接する中学校の文化祭の模擬食堂内で、町内の電気店から貸し出されたテレビジョン（白黒）で、当時の東京6大学のホームラン記録となる第8号打った立教大の長嶋選手の雄姿を目撃した思い出がありました…。



さて、絶大な権力を持ち、「何を考えているか分からない相手」、あるいは「その全体像が見えない相手」に人々は恐怖心を抱くように、トランプ大統領2.0は、常に相手を恫喝し、強弁を繰り返しているように見えて仕方ありません。（氏の発言を詳細に観察すれば、その発言の大半は思い付きのようでもあり、簡単に前言を翻しているようにも感じられます。）

内外の識者の指摘のように、第1期政権と第2期政権の決定的な違いは、政策プレーンの違いだといわれます。第1期政権では、安全保障にせよ、国内政策にせよ、それぞれの分野の一流の人物が政策立案者や顧問になっていた。（だが、その多くは大統領に対する“忠誠心”が足りないという理由で解任された。）

第2期政権のホワイトハウスのスタッフの大半はトランプ大統領に“忠誠心”を示す人物か、巨額の政治資金を提供した人たちで、彼らは、大統領に政策提言するのではなく、大統領の心を斟酌して、それを政策に転化させようとする人たちでもある。誰も大統領に諫言する者はいないし、逆にいえば、諫言すれば、第1期政権で見られたように排除されるだろうから、大統領の言うことに必死に耳を傾け、同調するだけの人たちである。

「イスラエル・ハマス戦争」と「ウクライナ戦争」の休戦交渉が進まない事態に直面して、トランプ大統領は初めて「自分の恫喝的な言葉」で外交政策を進めることができないと感じ始めているのが現状のようである。明確な将来に対する“国際秩序”に対する戦略がなければ、休戦交渉の仲介はできない筈だし、外交はビジネス取引とは違う。だが、トランプ大統領には、外交とビジネスの本質的な違いが理解できないと、痛烈な批判も散見されるようになってきています。（東京大学・久保文明教授）

先月のこの通信でも触れましたが、最近のトランプ大統領の言動は、アンデルセンの童

話「裸の王様」（周囲に批判者がいない中で非常識な行動をしてしまう権力者が主人公）然としてしていると評価されているのではないのでしょうか。本当は衣服が見えないのに王様をほめそやす家来に囲まれ、国民大衆は本心が言い出せなくなったりする…。怖いのは相次ぐトランプ流に感覚が次第にまひし、国際社会が「多元的無知」に陥ってしまうことです。「王様は裸だ」と叫ぶ少年がいない世界は、危機であると考えますが…。

